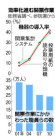


# カメラ監視、緊迫の開票…不正事件の高松市 香川知事選

細川 治子 2014年9月1日06時57分



開票作業をビデオカメラで記録する選管職員＝31日午後9時29分、高松市、佐久間泰雄撮影



香川県知事選が開票された31日夜、高松市の開票所には「監視の目」が張り付いた。票の不正操作で正確さをなおざりにした市選挙管理委員会は信頼を取り戻せるのか――。ビデオカメラが向けられ、県職員らが見守る異例の緊張感の中で、開票作業は進んだ。

## ■選管、信頼回復図る

午後9時10分、高松市香川総合体育館で投票箱が開封されると、200人近い職員が作業を始めた。2階の観覧席からは2台の監視カメラがにらむ。

お目付け役のコンプライアンス担当になった岡本英彦・市総務局長が作業台の間を歩き回り、進行状況をチェック。観覧席には数人の見学者の姿があった。参院選の時も作業を見たという市民の男性（40）は「雰囲気はぴりぴりしている。今回はきっちりやってくれるでしょう」と話した。近くに住む平木最（つとむ）さん（67）は投票所で作業を手伝った帰りに気になって立ち寄ったという。「不正操作なんて、なぜ馬鹿なことしたんだろうね」

カメラが向けられているのは、公職選挙法違反罪で起訴された3人のうち2人が担当した得票計算係と、最後の集積整理係の作業だ。6月の事件発覚から7月までに、市には約190件の苦情が寄せられた。信頼回復がかかる今回の開票作業。弁護士らでつくる第三者機関の選挙事務調査委員会の提言に基づき、監視カメラを設置し、コンプライアンス担当を置いた。

調査委では「職員の士気が下がる」とカメラ設置に慎重論も出たが、「事後検証のためにも記録しよう」と決めた。不正だけでなくミスも防ぐため、作業を細分化して責任を明確化。作業台はテープで仕切り、票の置き位置も指定した。

事件の背景には、開票を早く終えなければならないという重圧があったとされる。市の調査に対し、得票計算係だった職員は「机に票がたまって、早く処理して次に回さなければと思った」と答えたという。今回は各係が次の係に票を回す流れを見直し、作業状況に応じて前の係まで処理する票を取りに行く形にした。調査委は提言で「公正さ・的確さの観点から、迅速さを犠牲にしても再点検を躊躇（ちゅうちょ）すべきではない」とも呼びかけた。票の再点検を指示する協議や票を梱包（こんぼう）する作業には、コンプライアンス担当が立ち会う。

開票作業は午後 11 時 35 分に終了。知事選では今回初めて票の自動読み取り分類機を導入し、候補者は 2 人だったが、3 人が立候補した前回よりも 48 分遅れた。

作業を終えた市職員（53）は「これだけ注目された中での作業に緊張した。慎重に手順を踏み、誠実に実行することを心がけた」。開票終了後、市選管の東原博志事務局長は「失った信頼回復の一步をやっと踏み出せたかと思う。事件を受けて立会人にもより慎重に票の束をチェックしていただいた。注目を集めた選挙だったが、いい緊張感の中で作業に取り組めたのではないか」と語った。（細川治子）

## ■開票、効率化の波

自治体の財政難を背景に選挙の開票作業は効率化する流れだ。分類機の導入などに伴い、開票に当たる職員らの数は減っている。

開票事務の改善策を助言する早稲田大学マニフェスト研究所が 2013 年参院選の比例区を調べたところ、1 人当たりの毎分の処理票数は松山市が最多。人員は 10 年参院選より 35 人減らして 187 人だったが、所要時間は 20 分短縮した。ただ、正確性には気を配り、立会人が確認する際に候補者一人ひとりの名前と票数を読み上げている。

市区で所要時間が最短の 1 時間 38 分だった福島県相馬市。疑問票の判定にタブレット端末を導入し、候補者名の確認に検索機能を活用した。市選管の野坂隆男事務局長は「スピードアップの意味もあるが、大事なのは正確性だ」と話す。

同研究所の中村健事務局長は「先進的な自治体が早く開票を終えられるのは、正確性を追求した結果。早くしようと不正をするのは本末転倒だ。事件を機に、電子投票の導入など本格的な改革を行うべきだ」と指摘した。



## ■効果は不透明

《選挙制度に詳しい慶応大法学部の小林良彰教授（政治学）の話》 開票所への監視カメラ設置は異常だ。精神的な抑止力にはなるだろうが、不正防止にどのぐらい効

果があるのかは分からない。むしろ事件の本質は投票制度にある。候補者名を記入する「自書式」では、最終的には目で見ても手で数えないといけないため、投票数と開票数が合わない事態はどこでも起こり得る。再発防止には、候補者名や番号にチェックを入れる「記号式」に切り替えるべきだ。



〈高松市選管による票の不正操作事件〉 昨年7月の参院選比例区の開票作業で、高松市選管の事務局長（当時）ら3人は票が足りないと誤認し、つじつまを合わせようと集計済みの白票を再度数えさせ、後から見つかった衛藤晟一氏（自民）の得票を数えなかった。その後、前事務局長と職員3人は票の保管箱を開け、無効票約300票を取り出して捨てたとされる。高松地検は前事務局長ら3人を公選法違反（投票増減）罪で起訴。無効票を捨てた職員3人も封印破棄罪で在宅起訴された。9月2日に高松地裁で初公判が開かれる。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © 2014 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.